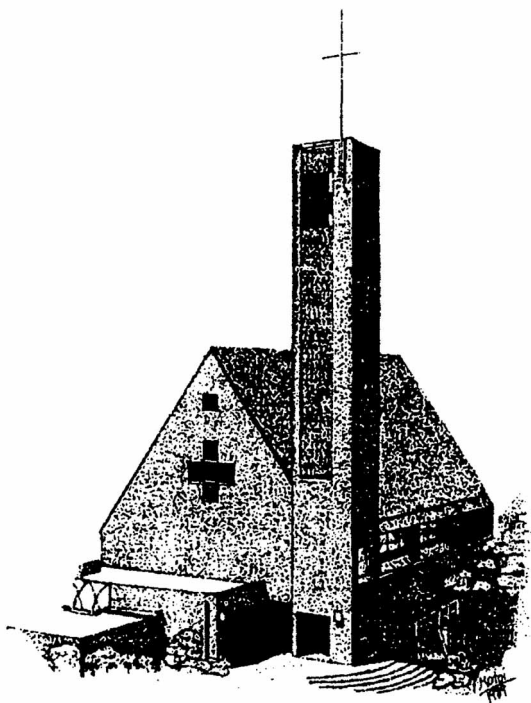


チャペルブックレット No.14

～お父さん、僕はなにじん？

- 間(はざま)から読む聖書 - ~

金 永秀



名古屋学院大学 宗教部



キム ヨンス
金 永秀

沖縄キリスト教学院大学 宗教部長。

1957年生まれ

最終学校 サン・フランシスコ神学大学院

専 門 歴史神学

～お父さん、僕はなにじん？ - 間（はざま）から読む聖書 - ～

金 永秀

沖縄キリスト教学院大学で教鞭を執っております、金 永秀（きむよんす）と申します。どうして沖縄から韓国人の講師が来るのかと思われるかも知れませんが、私は元々大阪と神戸の間にあります、甲子園球場で有名な兵庫県の西宮市で生まれ育ちました。在日韓国人朝鮮人の2世です。今日は、「間（はざま）から読む聖書」というタイトルで皆さんと聖書を開いて、しばし一緒に考えていきたいと思います。

私は関西で育った人間ですが、アメリカにも3年いました。また、カナダにも1年ほどおり韓国にも3年くらい留学のために滞在しました。そういう生活の中で、よく聞かれたのが、「どこから来たのですか（Where are you from?）」という言葉でした。それに対して「日本から来ました（I'm from Japan）」と答えますと、「では日本人ですね（You are Japanese, right）」と言われます。「いや、私は韓国人です。（No, I'm Korean）」と言うと、大体の人が首をかしげました。普通は日本から来たと言えば日本人だと判断されるのは当たり前だからです。このように日本語を上手に話せても、私は自分のことをJapaneseだとは言いません。間に生きる存在というのは、とかく認識されることのできにくい存在です。

さて「間（はざま）」ということについてですが、私はアメリカに滞在中、日系アメリカ人の人たちと会った時、こんな話を聞いたことがあります。ある人が10年ほど前に日本からアメリカに愛犬と一緒に連れて行ったそうです。日本ではそうではなかったのに、アメリカでは異常によく吠えるようになりました。日本では、普段吠えていなかったのに、なぜだろうと疑問に思っていました。それから10年ほど経ち、この飼い主も英語が上達し、ある日、この愛犬に対して初めて英語で話しかけました。そうしますと、その犬が初めて飼い主に向かって大きな声で吠えたそうです。どういふことかと申しますと、その犬は今まで自分が育った環境の変化と、人間から話しかけられていた「言葉」がアメリカでは違うことに、ずっと不安を抱いて吠え続けていたようです。しかし、自分の飼い主だけは日本語で話してくれていたので安心していたら、突然英語で話しかけてきたことに対し、抗議したのではないかということです。犬でさえ、間（はざま）に生きることが、いかにストレスが多いかということです。

またカナダでは、日本研究をしていたあるユダヤ系の女性と出会いました。その人と日本の歴史についてお話をしました。その人は大学の先生で、日本のことを熟知している方でした。彼女は「ヨンス、あなたの説明は、日本人が言っている歴史とは違うね。」というのです。それに対して私は彼女に言いました。「私は自分が日本にいるコリアンとして日本の歴史を見てきたので、このようなことが言えるのかも知れない。」といいますと、「私はあなたの言うことを信じよう。」と彼女は言いました。私は「なぜ、日本人でなく私の意見を信じるのか」と問うと、「あなたは日本のマイノリティーだからあなたの方が信じられるのです。」と答えました。マイノリティーというのは、社会における弱者のことです。彼女自身、ユダヤ人として欧米の社会的弱者として差別され、生活を送ってきたからと話しておりました。彼女も、社会の「間」で生きてこられた人でした。

「間」に生きる弱者というのは、聖書の中にも見ることが出来ます。今日は特にその中でも、マルコによる福音書5章のところに出てくる聖句を読んで、私の経験なども交えながら共に考えたいと思います。

“一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何がおこったのかと見に来た。彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった“

(マルコによる福音書の5章1節～15節)

今私が読みましたところは、ドフトエスキーの『悪霊』という小説の冒頭にもでてきます。又、「エクソシスト」という映画や他のホラー映画でも、悪霊がよく出てきますが、その悪霊の名前がレギオンであったりします。私たちが、悪霊に取りつかれるとはどういうことでしょうか？ そのこと的一端が本日の聖書に出てきます。ゲラサという所に住んでいた、悪霊に取りつかれた一人の男がイエスと出会い、悪霊をイエスによって追い出されたというのがこの聖書のお話です。この男はどのような悪霊に取りつかれていたのでしょうか。私はこの男は「間」に生きていたがゆえに、悪霊に取りつかれてしまった人ではないかと思います。このことについて後で詳しくふれてみたいと思います。

在日韓国人、つまり間に生きる人間が、実は結構日本にたくさんいます。とりわけ芸能界やスポーツの世界にたくさんいます。たとえば格闘家ではプロレスラーの力道山がそうですし、空手の極真会という流派を創設した大山倍達も在日韓国人です。事業家や映画監督、小説家にもおります。私は、在日韓国人には有名な人物がたくさんいるということを自慢して言っているではありません。そうではなくて、いわゆる一般的な官僚として勤めたり、企業で働ける人が、極端に少ないことを言っているのです。

どうして私たち韓国人朝鮮人は日本にいるのか、一体日本に何人ぐらいいるのかなど、皆さんは考えたことがありますでしょうか？ 法務省が編集した2005年度の在留韓国人統計によりますと、大体60万人おります。9年前の1996年では65万人でした。20年前の1985年には70万人近くいました。当時、日本にいた外国人の約90%以上が在日韓国・朝鮮人だったのです。どうしてこんなにも多くいるのかと申しますと、日本の朝鮮支配に因るのであります。実は1910年に日本が朝鮮支配をしていた時、日本にいた朝鮮人の数は、790人しかいませんでした。ところが、その後1919年頃には3万人の朝鮮人が日本に住むようになります。その理由として、日本が朝鮮支配をしたときに最初に行った土地調査事業、いわゆる朝鮮人から土地を奪うことをした政策に関係しています。土地調査とは名目上は近代的な土地登録をさせるためのものでした。しかし、実際どのようなことをやったかという、あるとき日本語で土地の登録をしなさいという立札が朝鮮半島一帯に立ちました。その頃の朝鮮人は日本語が分かりませんから、当然立て札の意味を理解出来ませんでした。又、当時の朝鮮の人々にとって、土地というのは先祖代々自分たちが所有していたものであり、近代的な土地の登記という概念が全くなかったのですが、そういうことが行われたわけです。土地の登記をしてい

ない人たちの土地は、朝鮮総督府により没収され、東洋拓殖会社というところに払い下げられました。これまで自分の土地として所有していた土地が、ある日突然自分の土地ではなくなったのです。このようにして土地を無くした人達が、日本の支配の10年後には、約3万人日本にやってくることになったのです。その後、朝鮮総督府は産米増殖計画というのを1924～34年にかけて行うのですが、1934年には朝鮮人の数は53万7千人までに達しました。産米増殖計画とは、朝鮮総督府が朝鮮の米を安く買い叩いて、日本に売りさばくというものです。これによって日本では米の値段がどんどん下がっていくという現象が起こっております。当時そのように国策として米価を下げることをしたため、多くの失業者が日本や、シベリア、満州に移民として移ることになったわけです。実は私の父親も戦争が始まる前に、韓国の大邱というところで農業を営んでいましたが、生活がやっつけなくなって、勉強をするために日本にやっけてきたわけでありませう。

しかし、最も日本に朝鮮人が増えた要因として挙げられるのは、強制連行によります。日本が敗戦した年の1945年には200万人を越える在日朝鮮人がいたといわれています。当時の日本人の若い男性はほとんどが徴兵で取られ、その代わりに労働力として朝鮮人が日本に連れてこられたのです。どのように連行されたかということ、道を歩いていると憲兵が「おい、おまえちょっと来い」と声をかけ、そのままトラックに乗せて日本に連行したり、朝まだ寝静まっている村の入り口に憲兵隊がずらっとやってきて、男たちを日本に無理やり連れ去っていくようなことがなされました。1年間で何十万人という朝鮮人が、このようなやり方で日本に連れてこられたのです。「北朝鮮」政府による、横田めぐみさんの拉致問題について、現在も日本中が関心をもって注目しています。拉致というのは、絶対に許してはいけません。しかし、考えていただきたいのは、日本の過去の歴史の中にも、大規模な日本人による朝鮮人に対する拉致があったということです。そのことに困り、現在の在日韓国人社会が形成されていったという事実があるということです。日本に強制連行されてきた人たちは、ほとんどが炭鉱、ダム、工場などで働かされることになりました。北海道の鉄道の線路の枕木は、朝鮮人の骨の数であるという言葉があるくらい、多くの人が亡くなっていきました。

さて1945年日本が敗戦した後、1年間で170万人ほどの人たちが朝鮮半島に帰っていきました。当時、ほとんどの朝鮮人が祖国に帰ろうとしていました。その頃の日本を支配していたGHQがその手助けをし、大勢の朝鮮人が母国に帰ることになります。しかし、しばらくすると朝鮮半島の釜山でコレラ菌が流行るなどの事情が起こるわけです。私の家庭の事情を言わせていただくと、私は8人兄弟の7番目になります。戦争

が終わって、「さあ祖国に帰ろうか」という時に母が姉を身ごもり、当時の日本と韓国の玄関口であった釜山でコレラが流行るなどの色々な事情が重なり、帰るタイミングを失って、ついに1950年に朝鮮動乱が起きます。この朝鮮動乱で膨大な死者がでるのですが、朝鮮半島が北と南とに分かれて戦争をし、結局大勢の在日が帰ることが出来なくなったのです。このようなことがあって、多くの在日韓国人が日本に残ることになったのです。

そのまま日本に残った人たちは法的にどのようなことになったかと申しますと、日本国憲法が公布されたのが1947年です。1947年5月に憲法が公布された一日前に、天皇の最後の勅令が出ます。その外国人登録令という勅令にこのようなことが書かれております。「台湾人の内務務総裁の定めるもの、および朝鮮人はこの政令の適応については、当分の間これを外国人とみなす。」とあります。その日から私たち「在日」は法律的には外国人とみなされるということになったのです。その後、1952年の5月にサン・フランシスコ条約が発行されます。この条約によって日本が独立するのですが、その時から、私たちは外国人であるということが決まったということです。

そのように、私たちは、法律的、社会的、個人的にいろいろな差別を受けてきました。法的に差別を受けるといことは社会的差別につながり、それが個人的差別へと悪い連鎖を起していくようになります。先ほど、芸能界、スポーツ界に韓国人が多いことをお伝えしましたが、他に職業の選択肢があまり無かったということが言えます。たとえ一流大学を出ても、就職先を選ぶ選択肢がなかなかないのです。実際に1970年には差別事件が起きました。ある在日韓国人青年が、色々な会社に履歴書を出しましたが断われました。最後に彼は日本名を借りて会社に応募しました。すると一次試験に合格し、二次試験にも合格し、内定を受けました。しかし、「私のような韓国人を採用して下さってありがとうございます」と思わず発した言葉で、韓国人だということがバレ、内定が取り消しになったということがありました。

かつて、NHKで在日韓国人のことをどう思っているかというアンケート調査を行いましたときに、日本社会において、朝鮮人は「臭い」、「汚い」、「ずるい」という意識調査の結果がでました。そういう感覚というのは韓流ブームになってからも、いまだに残っています。

1923年の関東大震災の時、朝鮮人の方たちが6千人ほど殺されたといわれます。当時の自警団が、自分の町や村を通る人たちに質問をします。「おい、5円50銭と言ってみる。」朝鮮人はこの発音が出来ませんでした。ハングルの言語習慣では、最初の音節には濁音が言えず、通常「こえん、こじゅっせん」としか言えないのです。そのことを

知っている者が、この質問を考えたのでしょうか。朝鮮人だと分かると自警団は、鳶口等の刃物で殺してしまうというようなことが、東京周辺で起こったわけです。そのようなことが、また起こるかもしれないという恐れを抱きつつ、私達は今でも生きています。

だいたい200人に1人の割合で在日韓国人がいるといわれます。そういたしますと、今私の話を聞いている学生さんの中にも、1人や2人はいらっしやるかもしれませんが。先ほども話に出ました大山倍達という格闘家は、超人的な力の持ち主で、今まで一流のボクサーやプロレスラーなどと他流試合しても負けたことが一度もなかったため、神の手“god hand”とさえ賞賛されていました。彼は終生、自分が在日韓国人であることを口外することが出来なかったのです。かつて極真会で映画を製作した時、この人が日本刀を抜くシーンで「武士の魂」というセリフを言うくだりがあります。肉体的には超人的な強さを持つ彼が、朝鮮人であることを公言できない。日本人であるといわざるを得なかったという点で、私は彼のような強者の魂を押しつぶしてしまうような日本社会の重圧というのは何かと思います。

私自身幼少の頃、近所の友達と遊んでいましたら、その子のお父さんが夜勤から帰ってきて、「朝鮮人帰れ！」と私に向かって怒鳴りました。又、思春期になってから、私はこのまま日本に居ていいのだろうか、と考えさせられた瞬間が2回ありました。私はその時の状況は今でも鮮明に覚えています。1回目が小学校6年生を卒業した時でした。あと一ヶ月程で地域の公立中学校に進学とするという時に、その中学校の校長から手紙が送られてきました。その手紙を見て父が私を呼び、その手紙の内容を話して聞かせたのです。「あなたは韓国人だから、本当はこの中学校に入る資格はありません。しかし恩恵として入学を許可します。もし、何か問題が生じた場合、すぐに退学処分としますので覚えておくように」というような内容の手紙でした。

それから2回目が16歳の頃。西宮市役所の瓦木支所に雨のふる中、初めて指紋を押捺させられたときのことです。日本で指紋を押すということはどういう時かという、ようするに犯罪を犯した時です。交通違反を犯した時など押印して、その記録が残されることになります。私は、その日16歳の誕生日でしたが、そういうことを経験するわけです。私はやがて大学を卒業して、神学校に行きまして、牧師になる勉強をしていたときのことです。大きな事件が起きます。1979年か80年の頃だったと思います。埼玉県「在日」3世の中学生が、学校の近くのビルから飛び降りて自殺しました。この子は幼少の時から朝鮮人ということですから一っといじめられてきました。この子に宛てたクラスメイトの卒業メッセージには「お前がいつ死んでくれるの

が待ち遠しい。」というようなことがいっぱい書かれてありました。精神的にも肉体的にも、相当ないじめがあったのです。私はその時、もし自分が牧師になった時、このような生徒を教会で受け持ったら自分はどう対応しただろうか？と真剣に悩みました。これが他人事ではなく、自分の家庭の中でも起りました。

私は牧師になり、豊橋市の教会に赴任をして仕事をすることになりました。その教会の敷地は、その地域では相当に広い敷地でありましたので、近所の人がある自分の子どもの自転車の練習に使わせて欲しいと頼みにきました。初めて近所の女の子と私の息子が出会ったのです。彼女が「お名前なーに？」と聞いてきたので、息子が自分の名前をいうと、「変な名前！」と言って馬鹿にしたように笑ったのです。息子は、自分の名前を嘲笑され、否定されたことに衝撃を受けて、家の中に走り帰って、家中の部屋のカーテンを全部閉めてしまいました。そのようにして差別から自分を守ろうとしたのです。

このようなこともありました。サン・フランシスコのベイエリアで勉強していた時に、下の息子が二人ともサン・ホゼにある日本人学校に通っていて、ある日、学校で本を読んでいました。まわりにいた同級生が騒がしいので「静かにしてくれないか」と言ったところ、一人の女の子が息子のほうを振り向いて「うるせーんだよ、この朝鮮人！ お前なんか、自分の国に帰れよ！」と言うのです。彼女はアメリカ生まれなのですが、差別意識が太平洋を越えるほどに広がっているということです。息子が深く傷ついたことは言うまでもありません。このような経験を経て、息子がある日私に質問したのです。「お父さん、僕は何人？ 日本人、それとも韓国人？」

皆さん方は、差別をどのようなものと考えてでしょうか？ある人は差別を説明するのに「足を踏んでいる人は足を踏まれている人の痛みは分からない」といいます。私の経験から言わせていただくと、差別の痛みというのはナイフで心臓をえぐるようなものだと思います。差別の本当の恐ろしさは、差別される人の存在意義を否定し、殺してしまうような力を持っています。その痛みは時に、感じることのできないほどに「痛い」ということがあるのです。

皆さんは心理学の授業で、フロイドという方の名前を聞いたことがありますでしょうか？この人は、精神分析の分野での偉人であるみならず、20世紀最大の偉人の一人であるといわれている人です。人間の心理分析の先駆者であります。彼がこのような分野に介入したきっかけとなったのは、彼自身ユダヤ人であったことと大きく関連していたといわれています。彼はある本の中で「どうして私は、自分の家族、自分の民族を恥じなければならないのか。」と書き残してあります。彼は幼い頃、父と町を歩

いておりました。父がユダヤ人の証である小さな帽子を頭に掛けて歩いていたら、前から来たオーストリア人にその帽子を手で叩き落とされてしまったのです。フロイドはその光景を見て、大変ショックを受けます。帽子を落とされたこともさながら、彼の父が、あたかも何事もなかったかのように帽子を拾って歩き出したからです。ユダヤ人の尊厳性を主張することが許されないということが示されたからです。

差別を受ける人間が抱える最も大きな問題は、アイデンティティー・クライシスを引き起こさせます。自分が誰なのかということに恥じ、主張できなくさせる、自分自身がわからなくさせるということです。「アイデンティティー」という心理学用語を造り出したのは、精神分析学者のエリック・エリクソンという人ですが、彼も自分の母親から自分の父親の素性を教えてもらえないという状況から「自分は一体何者だろう」という風に考えていくうちに、アイデンティティの概念の重要性に気づくことになっていくわけです。

さて、今日私が皆さん方と読みました聖書の中のマルコによる福音書の5章の1節で、イエスがゲラサという町に宣教活動に行くわけです。そこで、一人の悪霊に取りつかれた男がいた話をしましたが、この男がイエスと出会ったときに、「いと高き神の子よ、私を苦しめないでくれ」と言います。おかしいと思いませんか？通常でしたら「私を霊から解放して下さい」というのが正しいと思うのです。なぜこの男はこのようなことを言ったのでしょうか。また、名前を聞かれた時になぜ「レギオン（ローマ軍団）」と答えたのでしょうか。心理学の用語に「防衛制御」という用語があります。これは人間がある問題にぶつかった時におこす、様々な反応を示します。それは自分を守るために自分を抑圧するとか、合理化するとか、同一視、または逃避などの異常な行動をとることがあるということです。この男は自分の名前をレギオン（ローマ軍）つまり自分を治めていたローマの兵隊たちと自分を同一化して、そのように名乗ったのだと考えられます。

この男は、毎日自分自身を傷つけていたと、聖書はその病理を描写しています。ローマの軍団が自分を傷つけるように、自分も自身を傷つけようとしていたのでしょう。

同じようなことが、今から60年以上前にポーランドのアウシュビッツというところで起こりました。ユダヤ人たちがドイツ人に強制収容所に入れられてゆく中、その収容所の中でカポー（看守の下働き）となった一部のユダヤ人たちはいつしかドイツ人のように、あるいはドイツ人以上に、同胞達を苦しめたのです。そのことが、ピクトル・フランクという精神医学者がアウシュビッツに収容されていたときのことを記した本、『夜と霧』に記されています。聖書に出てくるレギオンと名乗った男も、ローマの

軍人がするように、その軍勢と自分とを重ね合わせるように、ローマの力の象徴である、レギオンという名を名乗り、自身を傷つけざるを得ないところに追い詰められていたのです。

私は沖縄からやってまいりました。最近、沖縄の11万人の人たちが宜野湾海浜公園というところに集まり、日本の教科書検定に対して抗議をしました。このニュースが報道されたことは皆さんご存知でしょうか。実は私の大学で学長まで務めた金城重明という先生は、この抗議の内容となりました「集団自決」の当事者であります。集団自決というのは、アメリカ軍が日本襲撃のため沖縄に上陸してまいりました時に、日本軍は手榴弾を各家族に手渡しておりました。通常軍隊が武器を一般人に渡すことはありません。あの状況で渡すということは、即ち死ぬと命じるということなのです。ところが歴史の教科書検定では、日本の軍隊はそのような命令はしていないということで問題になっております。金城先生によりますと、実際、手榴弾を渡されて、洞窟のところで家族が集まって肩を寄せ合い、手榴弾のピンを抜き、爆死するということがなされたといえます。実際に、村中の人々が集まってこのように自決したのです。金城先生の家族に渡された手榴弾は、不発弾でした。隣の家族も同様でしたが、突然、隣の家のおじさんが棒切で自分の家族をめった打ちにして殺し始めたのです。当時16歳であった金城先生はその異様な雰囲気の中で、自分も母親の首を近くにあった縄で絞め、ついには石で殺めてしまったのです。私はこの悲惨な話を初めて聞いた時、正直「どのようにして、この人は今まで気が狂わないで生きてこれたのだろうか」と思わざるを得ませんでした。

それ以上に大切な問いは、なぜ、沖縄の人々は自分の愛する人を傷つけ、殺めなければならなかったのかということです。色々な理由が考えられます。国家的な教育も関係があります。又、沖縄の人は当時日本語も満足に話せない人がたくさんいました。「自分たちが、何とか一人前の日本人として認められたい」、そういう思いで戦渦の極限状態の中、日本人として立派に死ななければならないという思いを強くしたということも考えられます。同じ状況で、他にも、当時親に殺されそうになって首に傷を負った人がいました。自分自身を、わが子を、わが親を、わが兄弟を強制的に殺さなければならない、そういう思いへと掻き立てられた人々の姿というのが、先ほどの聖書の中の悪霊、レギオンに取りつかれた男が、自分を傷つける姿と重ならないでしょうか。人が、時代の悪霊、社会の悪霊に取りつかれるということを、聖書は明らかにしています。私達はそのような悪霊から解放されなければなりません。

今日の聖句の中で大切なのは、イエスがこの男をどのように解放したかということ

が明らかになっています。イエスはこの男に尋ねます。「名前は何か？」これはつまり「お前は一体何者か」を問うているわけです。そのときに彼は「レギオン」と答えましたが、その時に彼自身の本質が問われたということなのです。彼は自分の本質を問われて、自分自身を取り戻していったということです。キリストによる問いの深みは、自己存在の深みを抉り出し、ゲラサの男に自分自身が誰なのかを直視させた。そして、癒したと考えることができます。私自身も、実はこの聖句に出会ったことにより、キリストによって解放され非常に大きな力を受けました。皆さん方もこの社会のゆがんだ価値観や思想に縛られ、取りつかれていることがあるかもしれません。福音書のほかの箇所にもこういう言葉があります。「自分自身を愛するようにあなたの隣人も愛しなさい。」この聖句の深い意味は、自分自身を愛し解放したものが隣人も愛することが出来るということ、自分を愛する時に、他者との「間」を越えて、隣人を愛する力が与えられるのだということをお明かにしております。自分自身を、そして隣人をこれからどのように解放していくのか、今日の聖句を通して是非考えていただきたいと思ひます。

2007年10月26日(金) 名古屋学院大学 秋の宗教講演会

～お父さん、僕はなにじん？

- 間（はざま）から読む聖書 - ~

金 永秀

チャペルブックレットNo.14

2008年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部
〒456-8612
名古屋市熱田区熱田西町1番25号
TEL 052-678-4096

印 刷 佐川印刷 株式会社